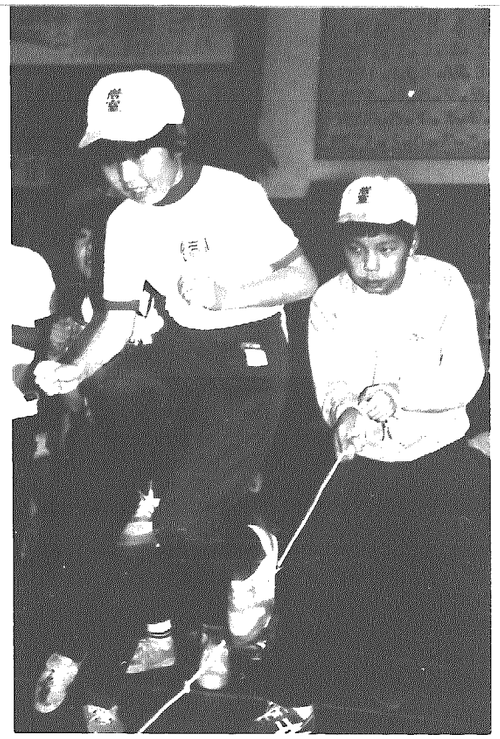
ハーイ！その調子で



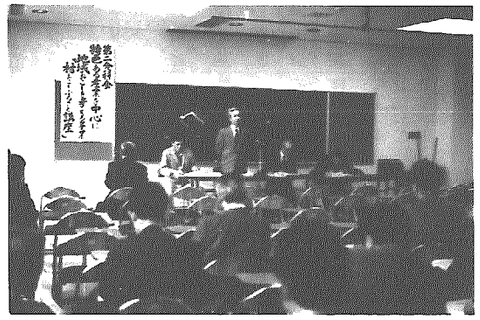
先月四日、岩室小学校で呼び物の〝なわとび大会〟が開かれました。「ハーイ！その調子で、イチッ、ニイッ、サン……」と、元気なかけ声が屋内運動場いっぱいに響きます。午前は各学年ごとに個人の記録会を、そして午後から全校児童が二つのグループに分かれ、大波の団体記録会。なわを回す子と、とぶ子の呼吸が合わないと記録を伸ばすことができないとあって、ウォーミングアップは念入りに――。先生のスタートの合図に「イチッ、ニイッ、サン……」とみんなで数えながら波をとぶ。調子のいいグループは一回のミスもなく、全員がまるで磁石に引かれるように上手にとんでいました。

貴重な経験を生かして

岩室中学校の卒業式

みんな元気で、これからもがんばってね

日差しもやわらかな先月十四日――岩室中学校で卒業式が行われました。通い慣れた校舎を巣立った百四十人の卒業生のみなさんは、どんな気持ちで別れをしたのでしょうか。楽しかったこと、苦しかったことなど様々な思いが込み上げてきたのでは……。先生や父兄、後輩の見送る中、一人ひとり別れのあいさつをしながら校門へ向かう卒業生。いろいろとすばらしい思い出がたくさんあったと思います。今までの貴重な経験を生かして、これからもがんばってね……。



みんなで考え、みんなでつくる

――岩室村生涯教育研究集会――

先月２日、岩室村公民館で「生涯教育研究集会」が開かれました。この研究集会は村が生涯教育の推進に取り組みはじめた時から、みなさんと一緒に生涯学習を考える機会として行ってきたもので、今回で４回目を数えます。

ことしは、国から生涯学習の研究委託を受けたことから、開発した三つのプログラムを主体に、その実践方法などについて熱心な討議をしました。250人の参加者は、午前の部では、片野二郎先生からプログラムの説明を受けたり、分科会討議を行い、午後は新潟大学教授の吉川弘先生の総評と講演に一日がかりの研修を真剣に行いました。また、お昼には、米消費拡大事業の一環として、村内の各農協からおにぎりのサービスもあり、大変喜ばれました。

岩室ネットワーク

いい顔、ありがとう

■この広報紙にあなたが写っていましたら、総務課企画係（☎82－4111内線 215）へご連絡ください。写真をさしあげます。

このひと No.6

越浦徳市さん（間瀬５区）

昭和二十八年から三十五年間、ひたすら子供たちの健やかな成長を願って、毎春、間瀬小学校に入学する子供たちに、さり気なくノートのプレゼントをしつづけた越浦さんの人間味を追って――。

今月の「このひと」は、間瀬五区にお住まいの越浦徳市さんです。

明治三十三年十二月二十日生まれといいますから、ことし米寿（八十八歳）を迎えます。これだけでは、「おめでたいことですね」－となっちゃうんですが、実はこの越浦さん。長い間、人知れず子供たちのために贈り物をしていた、〝あしながおじいちゃん〟なのです。

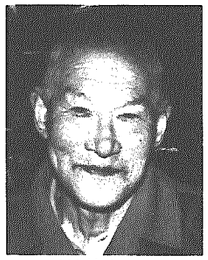
今から三十五年前の昭和二十八年の春から、毎年、間瀬小学校に入学する新一年生に真新しいノート（一～三冊）をプレゼントしていたんです。この間、間瀬小学校に入学した子供たちは約八百人。

二冊平均としてもざっと千六百冊のノートがプレゼントされたわけです。なかには、親子二代にわたってプレゼントを受けたかたもいるといいます。

ところで、ご紹介が遅れましたが、越浦さんは間瀬五区で「越徳商店」という小さな雑貨店を奥さんのミシさん（84歳）とご夫婦で開いています。この店は、戦前からある店で、越浦さん夫婦は昭和二十二年に旧満州から引き揚げて（越浦さんは戦前、旧満州国で総合建築請負業「越浦組」を営んでいました）来てから、先代の徳蔵さんの後を受け継いで、今日までやってきました。

昭和二十年代は、戦後の物資不足もあってか、越浦さんのお店はたいへん繁盛していたといいます。その ため、先代の徳蔵さんが亡くなるとき、いちばんのお客様であった子供たちのために、何か恩返しのようなものをして欲しい、との遺志を受け、昭和二十八年の春から、間瀬小学校に入る新一年生全員にノートのプレゼントをするようになったといいます。

仲のいい越浦さんと奥さんのミシさん



越浦徳市さん

「はじめは、本当に子供たちへの恩返しのつもりだったんだが、毎春、かわいい一年生やその親ごさんたちから喜んでもらえるもので、とうとう三十五年も続いてしまったんだよ」と越浦さん。「でも、間瀬の子供たちも数がだいぶ減っちゃったね。はじめのころは、七十人～八十人も一年生がいたが、今ではその十分の一以下だね」と子供たちの減少をさみしがる。

「おじいさんも今年米寿。体もだいぶ弱ってきたので、この春の子供たちを最期に、プレゼントを打ち切らせていただくことにしました」と奥さんのミシさん。

越浦さん夫妻は、教育にはことのほか熱心で、実の子供さんたちはすべて上級学校に入れ、〝学問は身を助ける〟と一生懸命がんばってきたそうです。お話をうかがっていても、そのしっかりした信念とやさしさが少ない言葉の中に感じられ、そんな教育への情熱は地区の人たちも周知のこととか。また、ともに俳句を詠まれ、姿見では、とても米寿を迎えるお年には見えません。「ボランティアのつもりで続けてきただけのことで、広報なんかに出されると……」と奥ゆかしい越浦さんの態度に、経験からくる素直さとやさしさを感じました。

――越浦さん、長い間、子供たちのために温かい贈り物をありがとうございました。これからもご夫婦仲良く、元気でお過しください。

「只見れば　白い岩山　連ら存れど　海に浮かぶや　趣き倍價」（原文のまま）という俳句を帰り際にいただきました――。